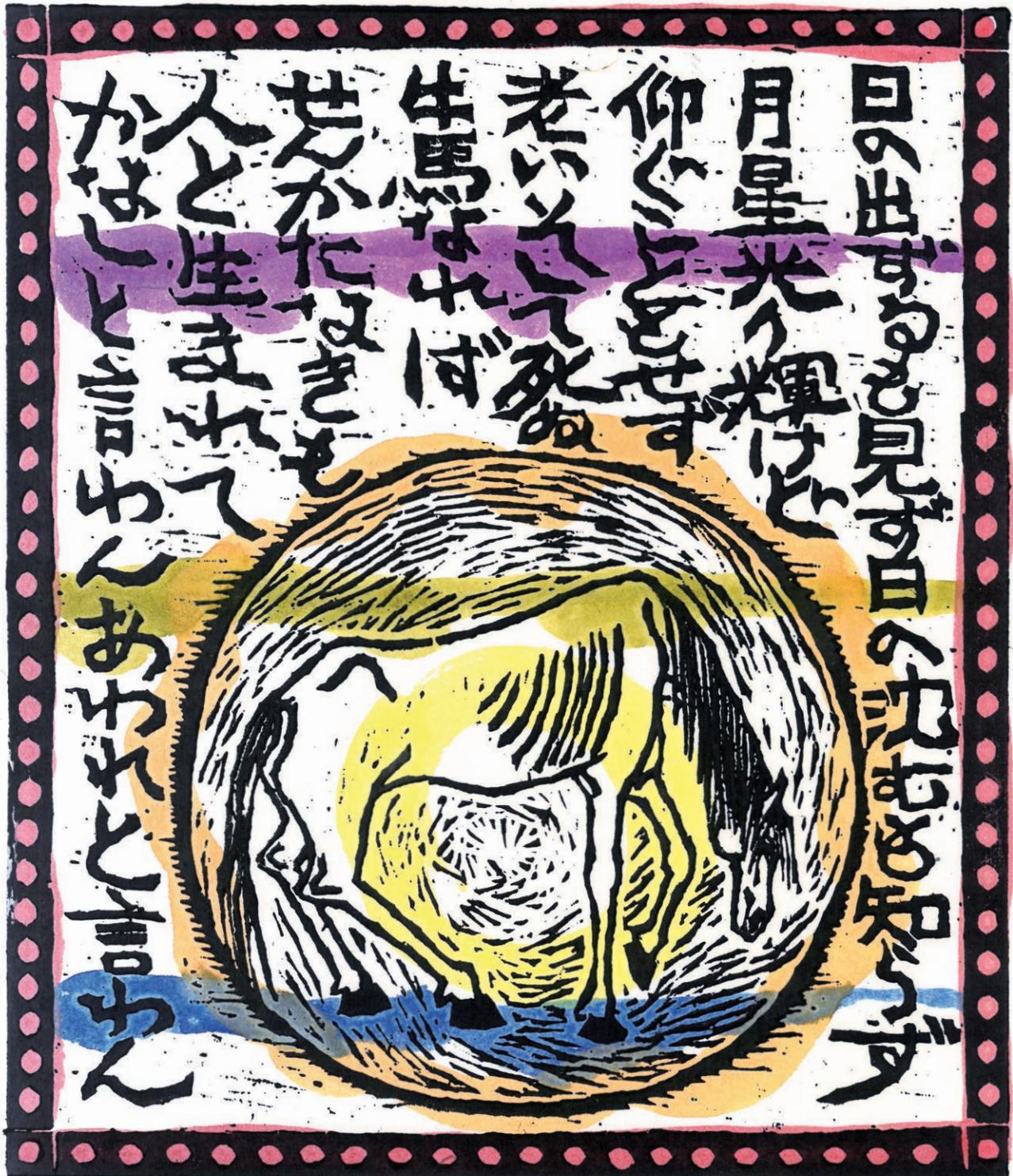


心木木だより

—— 友の会会員の皆さまと記念館を結ぶ会報誌 ——

vol. 51
2024 冬号



すずき出版発行「心のうたかれんだあ」(平成5年版)より 詩／坂村真民「人と生まれて」 画／海野阿育

坂村家のアルバム

vol.21

短歌で綴った癒えぬかなしみ

昭和15年1月、真民(31歳)は除隊になり、

忠清北海道清州公立高等女学校の先生として勤務に戻りました。そして、一兵卒の身で欠詠もせず無事除隊できたことは、詩神の加護であったとも云えようかと師への思いが強くなり、東京まで岡野直七郎先生を訪ねています。

さて、毎回一篇の詩を紹介するのですが、この冬号では、真民の短歌と共に話を進め、途中に説明の文章を挟むこともせず、時系列に淡々と流してゆこうと思います。それが、今号のテーマについて、当時の真民と妻・久代の心そのままに迫り、その思いが直に伝わってくるのではないかと考えるからです。ただし、短歌の表題と真民の説明文は付けておきます。



位牌 釈妙教孩女

白象受胎

八つちがいのゆえに結婚当初から、子供はできないものと言われてきた。そうした迷信を信ずる私たちではなかったけれども、どうやらそれは適中したようにも思えた。しかし冥々の力によつてか、私たちにも六年ぶりに奇跡のようなよろこびが生まれてきた。

子を欲りて妻がいふ言のかなしさは

夜天の星もききにつらむか

まどかなる夢に入りきし白象の

摩耶受胎伝ひそかにひもとく

告知

擬宝珠のましろき花の咲く家に

妻みごもれり奇跡のごとく

わが妻のおもひはつねに子ろにゆき

すでに産衣を縫ひそめにける

青空の淨き日ふたり樹の下に

二人にならむ身の幸を乞ふ

茜雲

すべては虚しい雲間の光であった。運命はわたしたち二人を地につきおとしてしまった。一切が闇となった。ただ茜と名づけることによつて、二人の心によつと支えるだけの光と色を見出して生き堪えたが、かなしみはなかなか癒えるものではなかった。

釈妙教孩女は愛しきわが子にて

思わぬときに涙しながる

かなしみのやや癒えし日の夕まぐれ

茜の雲に吾子や乗り込む

また二人寂しく住みてゆかんとす

移り来し家のいちはずの花

※1 摩耶受胎(まやじゆたい)伝: 摩耶夫人(まやぶにん)・釈迦の生母が、六牙の白象が胎内に入る夢をみて懐妊し、ルンビニー園で釈迦を出産したという連の伝え話。

※2 擬宝珠(ぎぼうし) : ユリ科ギボウシ属の多年草の総称。葉は根生し、夏に、白色・淡紫色・紫色などの花を穂状につける。

※3 いちはつ : アヤメ科の多年草。春に、紫色または白色の花が咲く。

表紙の詩



人と生まれて(67歳)
 日の出ずるも見ず
 日の沈むも知らず
 月星光り輝けど
 仰ぐこともせず
 老い
 そして死ぬ
 牛馬なれば
 せんかたなきも
 人と生まれて
 かなしと言わん
 あわれと言わん

この詩は昭和51年9月に出された「詩国15巻9月号」の表紙の詩として初出されています。

その時の題名は「美」でした。その後「坂村真民全詩集第3巻」に収められる時に、「人と生まれて」と題名を変更しています。そこから察することができるのは、最初の題名「美」について、真民が考える「美」とは、何かということです。

因みに、この詩が書かれた昭和51年8月13日の「詩記」には、朝の祈りの時に見た、「石鎚山からの日の出の美しさ」を、今までにないほど美しかったと書き、その後に「美」の詩が生まれているのです。ここで真民は、人間として生きていくうえで、必要な「美」とは、何かを訴えているのです。

日が昇り、日が沈むその美しさ、月星の輝く美しさを、美しいと感じ、美しいと思って生きていく、そういう人間になりたい、ということを行っているのではないのでしょうか。

初盆もすぎて

息絶えて生まれし吾子の愛しき手に

さやりなげきし夜を忘れず

目もみえず乳も飲み得ぬ子がひとり

賽の河原にさまよふらむか

「歌集 石笛」(1962年1月発行)より

真民32歳の3月8日、待ちに待った第一子の誕生日は命日となってしまいました。翌月の4月には、全羅北道官立全州師範学校に転任しているという事実から、二人の悲しみの大きさとその深さが伝わってまいります。何を見ても思い出して悲しみから立ち直れない、その記憶を振り切るように移って行ったのでしよう。

清州女学校の生徒達はお小遣いを出し合っていて、町で売っているなかで一番大きいお人形さんを「茜さんだ」と思って元氣を出して下さい」とプレゼントしてくれました。先生と女学生の絆の強さにも感動します。このお人形さんは、後に坂村一家を助けてくれることに、次号での展開をお待ちください。

文／西澤真美子

「真民」の読み方の推移について

坂村真民の本名(戸籍名)は、「坂村 昂(たかし)」です。「真民」という名前は、急逝した父親のように、若死にしないようにと、真民の母親が姓名判断の大家に付けてもらった名前なのです。

真民がこの名前を初めて使ったのは、神宮皇学館に入学した18歳の時で、学内で発行されていた雑誌に短歌を投稿した時に、筆名として使ったのです。この時の思いを「坂村真民全詩集第5巻」の巻末に載せている「年譜」の中で、「真民は母の願いによる名」と書いています。

この時以来、真民は、短歌雑誌や民謡歌謡誌、20代を終える記念として出版した「与謝野寛評伝」でも、筆名として「真民」という名前を使うようになりました。

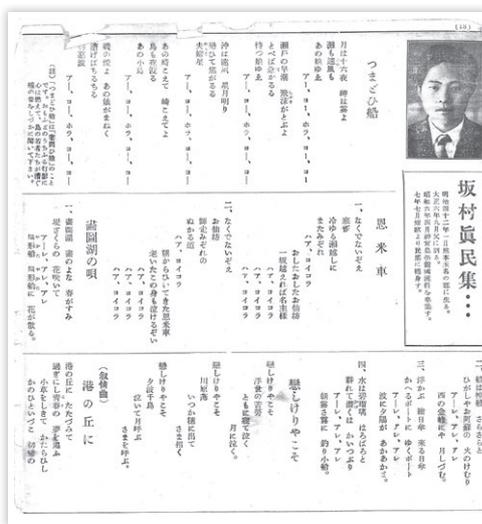
しかし、その名前の読み方は、「まさたみ」若しくは「またみ」と読んでいました。「まさたみ」が、母が姓名判断で付けてもらった「真民」の本当の読み方なのですが、真民自身も、通常は「またみ」と読むことが多かったようです。

自費出版の詩集を発行するようになった時も、その「奥付」(発行者名、発行日等を記載する最後のページ)には、真民に「またみ」とフリガナを付けています。また、宇和島東高校の卒業生の方々に聞いても、真民のことを「またみせんせい」と呼んでいたようです。

「真民」を「しんみん」と読むようになったのは、昭和42年12月に、NHK教育テレビで仏教学者の紀野一義先生と対談した時に、紀野先生から「しんみんさん」、「しんみんさん」と呼ばれ、その番組が全国放送されて、これからは自分も「しんみん」と名乗ろうと思ったことがきっかけなのです。その時の思いを真民は、昭和42年12月26日の「詩記」の中で、「これから、みなさん、わたしを、しんみんさんと呼んでください。西行さん、良寛さんと呼ぶように、しんみんさんと呼んでください。」と書いています。この日から、「坂村真民」は「さかむらしんみん」となり、詩人・坂村真民(さかむらしんみん)が全国にデビューすることになるのです。

熊本時代

神宮皇学館を卒業して熊本で小学校の代用教員をしていた頃。



昭和8年2月発行

真民詩を人生の心の糧として

奄美坂村真民の会事務局長 積山泰夫



初めて真民先生の詩に触れたとき、大きな感銘を受けたという積山さんは、教員生活を通して、多くの子どもたちや保護者、同僚らに真民詩の素晴らしさを紹介続けた。心の中には、常に真民詩があったという。

◆真民詩との出会い

昭和63(1988)年4月、鹿児島大学付属中学校に勤務していた私は、一年生の担任となりました。

真新しい道徳の副読本を開くと、色鮮やかな黄色いタンポポの花を背景に「タンポポ魂」という詩が載っていました。私はこの詩に感動し、早速、学級通信「若き花」に掲載しました。

それをきっかけに、先輩から真民先生の署名入りの『自選坂村真民詩集』をいただき、自分自身でも『念ずれば花ひらく』『生きてゆく力がなくなる時』『愛の道しるべ』等を買求め、愛読しつつ生徒に紹介しました。また、詩を読んだ感想や学級の様子・写真等を先生にお送りして、先生から「詩国」を送付していただきました。

平成5年、大口市(現伊佐市)教育委員会で指導主事として勤務した時、同市の小・中学校(14校)の先生方と熊本へ研修旅行に行き、荒尾市府本の小代焼ふもと窯を訪れました。そこで初めて大きな詩碑「念ずれば花ひらく」を見ることができました。

平成11年4月、私は母校である龍郷町立龍北中学校に校長として赴任しました。道徳や学級活動の時間に、真民先生の詩を直接生徒たちに教えることはありませんでしたが、生徒・保護者向けの校長便り「敬愛く学舎小景」を発行しつづけて、その中で真民詩を紹介しました。それらは、「タンポポ魂」「二度とない人生だから」「すべては光る」「足の裏の美」「本気」「一本の道」等です。

私は学校に真民詩碑を建立したいという夢を抱き、真民先生に「すべては光る」「念ずれば花ひらく」を揮毫していただきました。

◆詩碑「すべては光る」建立

平成14年4月、私は故郷の喜界町立第一中学校に転勤となりました。平成15年2月15日、笠利町(現奄美市笠利町)歴史民俗資料館で詩碑「念ずれば花ひらく」の除幕式が行われました。

私は当日の朝、喜界島から飛行機で奄美大島に飛びました。景勝地に建つすばらしい自然石の詩碑に触れ、真民先生にもお会いできて感無量でした。夜は祝賀会、翌日は奄

美パークで先生の講演「一村さんと私」を拝聴できて感激することひとしおでした。

それから間もなくして3月4日に、詩碑「すべては光る」(可能性の碑)を第一中学校の本館前に建立・除幕いたしました。真民先生から「わたくしの人間観」と題するメッセージが寄せられ、「喜界が島を光る島として成長してください。」と結ばれていました。

私は、真民詩を人生の心の糧として、生徒・同僚や多くの人たちと共有してきました。これからも愛読しつづけて、人生を深めていきたいと考えています。



喜界町立喜界中学校の本館前「すべては光る碑」2024年8月

坂村真民記念館を応援しています



『木は氣なり』

百年の木には百年の氣が宿り

千年の木には千年の氣が宿る

鳩寿四 真民詩

南木曾木材産業株式会社

〒399-5302 長野県木曾郡南木曾町吾妻1187 代表取締役 柴原 薫

TEL 0264-57-4000 FAX 0264-57-2006 <http://www.nagiso.co.jp> メール kao@nagiso.co.jp

砥部の地で、医療、看護、介護の三位一体を実現する砥部病院



介護付有料老人ホーム

To-be

全78居室/20㎡~24㎡(1F&2F)



住宅型有料老人ホーム

モンレーヴ砥部

全18居室/40㎡~90㎡(3F)

伊予郡砥部町麻生51-1(砥部病院西隣) TEL.089-969-0085 砥部病院ケアサービス株式会社

サンマーク出版 坂村真民の本

詩墨集
筆の詩墨の花



●定価=本体 3500円+税

坂村真民記念館
所蔵の作品を満載!

随筆集
念ずれば花ひらく



●定価=本体 1800円+税

初めての
随筆集を復刻!

念ずれば花ひらく



10万部突破の
超ロングセラー!

いま届けたい、生き方の道しるべ



詩集
宇宙のまなざし

詩集●定価=本体各1000円+税



詩集
二度とない人生だから

サンマーク出版

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-16-11
TEL 03 (5272) 3166 FAX 03 (5272) 3167
<http://www.sunmark.co.jp>

広告募集中

「タンポポだより」に広告を出してくださる
企業・団体等を募集しています。

[広告料]

1枠(タテ60mm×ヨコ170mm) …… 年間10万円

- 年間発行部数/2,000部(年4回発行)
- 送付先/友の会会員、県内社会教育施設、県内旅行・観光業者等その他、記念館の来館者に配布

「タンポポだより」の発行費用は、この広告料で賄っています。それによって、友の会の会員の皆様からの会費は、タンポポだよりの送付料や記念館の活動経費に充てることが出来ます。記念館の活動を充実させるためにも、広告料収入が必要不可欠です。どうぞ、このような趣旨をご理解くださり、広告掲載へのご協力をお願いします。



